

第3回 Planetary Health Symposium

プラネタリーヘルスのフレームワークで築く人類と地球の共生社会

Crafting a Symbiotic Relationship between Humans and Earth: A Planetary Health Approach

開催報告書



2024 年 11 月 9 日（土）に広島大学 IDEC 国際連携機構と日本学術会議環境リスク分科会共同主催による、プラネタリーヘルスシンポジウムを開催しました。

プラネタリーヘルスと本シンポジウムの概要

プラネタリーヘルスとは、人間の健康と地球の健康は独立ではなく、相互依存によって成立しているとの認識の中、人間の政治・経済・社会のあり方を注視しつつ、最上の健康・ウェルビーイングと公正性を実現することです。しかし、私たちはすでに多くの取り組みを、それぞれの持続可能な開発目標の中で実践しているのではないのでしょうか。これら既存の取り組みにおいて、プラネタリーヘルスはどのように関係し、どのような役割を持っているのでしょうか。このシンポジウムでは、世界でプラネタリーヘルスのフレームワークづくりに取り組んでいる、プラネタリーヘルスアライアンス創設理事長で、ジョンズホプキンスプラネタリーヘルス研究所所長・教授のサミュエル マイヤーズ博士をお招きして、激変する地球環境において人々の健康を守るためプラネタリーヘルスがどのような役割があるか、そして、今世界的な枠組みとしてどのように取り組まれているかについて、お話をいただきました。続いて後半のパネルディスカッションでは、環境政策の3つの主要な活動「自然再興（ネイチャー・ポジティブ）」、「脱炭素（カーボンニュートラル）」、「循環型経済（サーキュラーエコノミー）」がどのように人々のウェルビーイングと健康に関連するのか。そしてこれら3つの主要な活動とプラネタリーヘルスの関係について、それぞれの分野で活動されているパネリストの皆様と共に、プラネタリーヘルスアプローチを通じて、人類と地球の共生関係を築くことについての議論が展開されました。

シンポジウムでは、広島大学理事・副学長の田中純子先生と、共同主催である日本学術会議環境リスク分科会委員長の中村桂子先生に、あいさつをいただき開幕しました。基調講演として、サミュエル・マイヤーズ氏による『プラネタリーヘルス：激変する地球で人々の健康を守

る』のテーマで、講演をいただきました。人類の発展と幸福に関するほとんどの指標が改善されている現在、その一方で地球の自然システムが崩壊し始めているという、私たちは歴史的瞬間の真にユニークな点に直面しています。これら人々の健康と自然システムの崩壊という二つの局面は切り離されたままではいられず、過去数十年間の健康とウェルビーイングの改善が不安定な生命維持システムによって脅かされていることを示すプラネタリーヘルス研究が紹介されました。私たちが直面している今この現状に対応するには、すべてのシステムにわたって生活の考え方を急速に変革することが必要であり、一人一人が参画することによって、政治的および社会的意志を生み出すことの重要性についての強いメッセージが発せられました。

次の教育講演では、長崎大学プラネタリーヘルス学環前学環長の渡辺知保氏に『人類生態学の視座とプラネタリーヘルスの日本での実践』の講演をいただきました。プラネタリーヘルスの認識は、人類生態学 (human ecology) あるいはエコ・ヘルスなどの分野にも共通している一方で、その関連が議論されることはこれまでほとんどなく、どのような共通性・異質性があるのか、そして人類生態学のアプローチのプラネタリーヘルスにおける有用性について議論されました。そして最後に、日本で現在実施されているプラネタリーヘルスにかかわる取組みの現状と課題が紹介されました。日本でも 2020 年頃から、その取り組みが活発になってきていますが、まだ現時点で共通したアジェンダや人材像はなくその協議の必要性や、プラネタリーヘルスの今後国内の活動の実態調査を実施することが、その考え方の普及にも有効であることなどが紹介されました。

後半のパネルディスカッションでは、5 名のパネリストによる発表がはじめにありました。「ネイチャーポジティブ」から、Rooting Our Own Tomorrows (ROOTs) 代表の安家叶子氏による『次世代に残せる地球のために：生物多様性とプラネタリーヘルスへの責任』の発表では、今失われている自然を 2030 年までに喪失からポジティブへの変換を目指し、そして 2050 年までに完全回復するべく取り組みが紹介されました。生物多様性の喪失には、私たち人間の活動が大きくかかわっており、その中の野生生物の違法取引の現状について、マスメディアの役割や、私たちも知らないうちにその取引に関わっている点などが強調され、今後のネットポジティブへの社会的取り組みについて紹介されました。次に、「カーボンニュートラル」から、国立環境研究所社会システム領域 領域長の増井利彦氏が『脱炭素社会の実現に向けた取組と課題』について発表されました。これまでの気候変動課題に対する取り組みでは不十分であり、世界的そして日本でどのようにネットゼロ社会を達成するのかについてお話があり、革新的技術の導入にだけ依存するのではなく、普段の取り組みが重要であり、社会変容が目標達成のためには必要である旨のお話がありました。様々な分野間のコミュニケーションを通じた長期的、多面的な視点からの取組と、特に社会変容の実現がネットゼロ社会達成の鍵となる点が最後に強調されました。次に、広島大学 IDEC 国際連携機構教授の藤原彰正氏による『スマートモビリティ・プラットフォームをベースとした健康に歳を重ねる都市』のお話がありました。ここでは、カーボンニュート

ラルで健康に歳を重ねる（ヘルシーエイジング）社会の実現に向けた課題についてのお話がありました。一見、対立もしくは関係性のない両事項をプラネタリーヘルスでつなぐことにより、同時にかつ長期的に展開することが可能となり、この枠組みの中でスマートモビリティ・プラットフォーム（街ぐるみシミュレーターや、デジタルツインサンドボックス等）の開発を行い、新しい関連性やパスをより早くより多く発見するための技術開発について紹介されました。次に「サーキュラーエコノミー」からは、広島大学大学院統合生命科学研究科博士課程 1 年生の宇野真樹氏と同研究科准教授の長命洋佑氏による『食の地域循環』についての発表がありました。「循環型社会」は廃棄物処理対策の延長線上にあり、廃棄物が発生することを前提としていたのに対し、「循環型経済」は製品設計等の段階から廃棄の可能性をなくし、資源が循環し続ける仕組みであることが紹介され、広島県生口島の廃棄物を出さない取り組みや、愛媛県松山市の異業種間で連携した食品リサイクル・ループの取り組みなどの実践例が紹介され、またこれら活動が循環型経済へ移行するためには、異業種間のマッチングや連携体制の構築などの課題等が提示され、また意識しなくても環境配慮ができる仕組みづくりの必要性等が提示されました。そして、最後に東京大学大学院医学系研究科教授の橋爪真弘氏による『熱波とエアコン使用：エネルギー需要の増加と健康適応の課題』が発表されました。気候変動によって、毎年猛暑が続き、熱波による熱中症が増加しており、その現状及び将来推計についての報告がありました。また、それを防ぐためには、エアコンの利用が必要であるが、一方でこれにより温室効果ガス排出につながり、エアコン資料はその排出の約 4%を占めていること。そして、その使用料は将来増加することが予測され、クーリング・ジレンマが存在する。これらのジレンマに対しての政策や、低予算での個人による介入の必要性などが紹介されました。

これら 3 領域、5 課題からの発表を受けて、サミュエル・マイヤーズ氏もパネルディスカッションに参加をし、①それぞれの領域での取り組みがウェルビーイングと健康にどのようにつながるか、そして時間軸はどうあるべきか、②PLH の枠組みの中で、他の領域とどのような協力・協働が必要かの 2 点についてパネリストと参加者の皆さんと議論がなされました。特に②の質問においては、分野間の協力・協働は必要不可欠であるが、それを行うには、その地域に住んでいる人々の声を聴き、これまでの経験がどのように活用できるか、時間・空間スケールをどのようにそろえるかの議論の必要性や、また領域を超えた取り組みを先導できるリーダーシップの必要性について議論されました。どこにターゲットを置いて、どの順番でどのような方法を取るべきかについて、アカデミアの責任として、政策の順序や、時間スケール等を解像度よく予測できる枠組みを作る必要がある点。また、サーキュラーエコノミー等の仕組みを作っていく初めの段階で、その他領域（カーボンニュートラルや、ネイチャーポジティブ）を入れ込んでいける仕組み作りが必要である点。今回議論された 3 つの領域はプラネタリーヘルスを達成するためのパスウェイであり、これら 3 つのゴールとしてプラネタリーヘルスという共通目標の設定が可能で点などが提示されました。これを受けてマイヤーズ氏は、すべての人がリーダーになる必要性和、共同・協働を行っていくためには、このシンポジウムのように、分野が異なる人々においてもその

経験、課題、そして解決策を共有し、それを社会にレフレクションさせることが大事であり、共に考える場の構築と、そしてネットワークの重要性についてのコメントがありました。また、会場からも政策におけるフラグメンテーションを減少させるにはどうすべきかについて質問があり、プラネタリーヘルス政策者が集まり政策、外交、ガバナンス等を議論する必要がある旨などの質疑応答も活発に行われました。まだまだ議論したい内容が続く中ではありましたが、最後に、広島大学グローバル担当 副学長・理事の金子真治氏より閉会の挨拶があり、シンポジウムが閉会いたしました。

激変する地球の健康を守ることが、我々の健康を守ることに直結します。私たちは、今地球規模で起きている課題にちゃんと目を向け、そして地球に生きている一人の人間として、この課題解決と共に私たちの健康をどのように守っていけるかを考え続けなければなりません。それには、それぞれの領域等で個別のゴールのみを目指すのではなく、その先にある「将来世代にわたった私たちの健康・ウェルビーイングを守れる人類と地球の共生社会構築」という共通目標の設定の必要性を強く感じました。今回のシンポジウムは、時間的制限もあったため、まだまだ語りつくせていない部分が多くありますが、人類と地球の共生社会構築のためには、分野を超えてさらに知見の共有と議論をしあう必要性があること、これらができる場およびフレームワーク作りの重要性が共通認識としてとりまとめられたと考えます。

このシンポジウムには、会場、オンライン合わせて 130 名の皆様に参加をいただき、時間内に取り上げることができなかった質問も多数あります。ご参加いただきました皆様に感謝を申し上げますとともに、今後も共に皆様と継続的に議論を行っていきたいと存じます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

鹿嶋 小緒里

シンポジウム実行委員代表

広島大学 IDEC 国際連携機構プラネタリーヘルス・イノベーションサイエンスセンター

センター長・准教授

第3回 Planetary Health Symposium

プラネタリーヘルスのフレームワークで築く人類と地球の共生社会

Crafting a Symbiotic Relationship between Humans and Earth: A Planetary Health Approach

(日本学術会議環境リスク分科会共同主催)

概要：プラネタリーヘルスとは、人間の健康と地球の健康は独立ではなく、相互依存によって成立しているとの認識の中、人間の政治・経済・社会のあり方を注視しつつ、最上の健康・ウェルビーイングと公正性を実現することです。しかし、私たちはすでに多くの取り組みを、それぞれの持続可能な開発目標の中で実践しているのではないのでしょうか。これら既存の取り組みにおいて、プラネタリーヘルスはどのように関係し、そのような役割を持っているのでしょうか？そこで、世界でプラネタリーヘルスのフレームワークづくりに取り組んでいる、プラネタリーヘルスアライアンス創設者サミュエル・マイヤーズ博士をお招きして、「自然再興（ネイチャー・ポジティブ）」、「脱炭素（カーボンニュートラル）」、「循環型経済（サーキュラーエコノミー）」の3つとのプラネタリーヘルスとの関係性について、それぞれの分野で活躍のパネリストの皆様と対談いたします。

日時：2024年11月9日（土）13:00 – 16:20

開催方法：ハイブリッド（ZOOM と会場開催）

会場：[広島大学霞キャンパス 凌雲棟](#)（広島市南区霞 1-2-3）

（注意）公共交通機関でご来場ください。（[アクセス](#)）

言語：会場言語 日本語、同時通訳（英語）

主催：広島大学 IDEC 国際連携機構, 日本学術会議環境リスク分科会

共催：Planetary Health Alliance Japan HUB

プログラム

開会挨拶

田中 純子, 広島大学 理事・副学長（霞地区・教員人事・広報担当）

学術会議環境リスク分科会委員長 挨拶

中村 桂子, 東京科学大学(旧 東京医科歯科大学)国際保健医療事業開発学, 教授

趣旨説明

鹿嶋 小緒里, 広島大学 IDEC 国際連携機構 プラネタリーヘルス・イノベーションサイエンスセンター(PHIS), センター長/准教授

基調講演

『プラネタリーヘルス：激変する地球で人々の健康を守る』

サミュエル・マイヤーズ

プラネタリーヘルスライアンス, 創設理事長 / ジョンズホプキンスプラネタリーヘルス研究所, 所長 / ジョンズホプキンス公衆衛生大学院, 教授

(モデレータ：渡辺 知保)

教育講演

『人類生態学の視座とプラネタリーヘルスの日本での実践』

渡辺 知保, 長崎大学大学院プラネタリーヘルス学環, 教授/前学環長

(モデレータ：中村桂子)

休憩

第2部 パネルディスカッション

モデレータ

三本木 至宏 広島大学大学院統合生命科学研究科 教授

鹿嶋 小緒里 広島大学 IDEC 国際連携機構 PHIS センター長/准教授

パネリスト

1. 安家 叶子(Rooting Our Own Tomorrows (ROOTs) 代表、国際自然保護連合日本委員会 (IUCN-J))

『次世代に残せる地球のために：生物多様性とプラネタリーヘルスへの責任』

2. 増井 利彦 (国立環境研究所社会システム領域 領域長)

『脱炭素社会の実現に向けた取組と課題』

3. 藤原 章正 (広島大学 IDEC 国際連携機構 PHIS 教授)

『スマートモビリティ・プラットフォームをベースとした健康に歳を重ねる都市』

4. 宇野 真樹 (博士課程1年) & 長命 洋佑 (准教授) / (広島大学大学院 統合生命科学研究科 食料資源経済学研究室)

『食の地域循環』

5. 橋爪 真弘 (東京大学大学院医学系研究科国際保健政策学 教授)

『熱波とエアコン使用：エネルギー需要の増加と健康適応の課題』